

知恵の樹

No. 144 2009. 11.18

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

私と図書室

都立学校教員 鈴木 薫



私は今年で26歳になる。最近、教員になった。だが、目指していた司書教諭職にはなれていない。私が司書教諭を目指そうと思ったのは、高校生の時。私立高校の図書室には司書さんがいた。司書さんがいる図書室には秩序があり、とても居心地の良い場所だった。中学生のときには、陰気臭い図書室の鍵が昼休みだけ、図書係りの生徒によって開けられていたと思う。だが、先生の居ない空間は、よい追いかけてこの遊び場としてしか機能していなかったから、私はほとんど利用しなかった。もちろん、時折、授業で連れて行かれたこともある。だが、調べ物をするなら、近所の公民館図書館か、一般的ではない蔵書量を誇る我が家の方がよほど便利だった。

一概に言い切れないが、とにかく本がたくさんある家に育つと、公共図書館のありがたみは薄くなる。借りて返すよりも、買ったほうが早い。だが、そんな読書生活を送り続けると、自分の興味の幅でしか本を読まなくなる。本屋では購買が目的だから、興味のある文学や歴史以外の棚に行っても、積極的に本を手には取らない。だが、図書館では購買が目的にはならないから、気になる本は片っ端からめくってみた。本屋で立ち読みできる時間は良心の範囲内だけれども、図書館では時間の許す限り好きに本を眺められる。私立高校の図書室で、私は買うための本と、読むための本の違いを知った。

知識と出会う扉として触れた本で、後々に進路が左右されることもある。小学校の図書室は、小奇麗で

よく昼休みに利用していた。そのときに読んだ『まんが・中国の歴史』や『まんが・世界の歴史』は印象深い。これらの本をきっかけに、歴史に興味をもった。大学受験にあたり、歴史学科東洋史専攻などというところを選んだのは、間違いなくこの小学生時代の影響に端を発している。一方、公共図書館を利用した記憶があるのは、小学校時代だけだ。自転車で気軽に行ける距離に公民館図書館があった。蔵書数は多くないが、小学生にとっては十分な内容で、調べ物はしやすかった。その後、引っ越した先のS市は図書館が少なく、電車に乗らなければいけない場所にあった。近所の公民館図書館も1度だけ行ったが、田舎町にあった公民館図書館より御粗末な内容で2度は行かなかった。規模は小さくなくてもいい。管理されていると感じる、利用しやすい雰囲気をもつ図書館でなければ、2度3度とは通わない。学校図書館でも、それは同じだと思う。ただ本はあればいいというものではない。管理をし、アドバイスできる者の存在が重要だ。私が学校図書館をイメージする時に出てくる、自分が卒業した私立高校には司書さんがいた。だが、現状の公立学校には司書が不在だ。

私の家族も教員をしている。だが、私が「司書教諭を希望する」と言うたびに、今でも難色を示す。理由は簡単だ。学校内において司書教諭とは、専門的に図書館業務に従事するのではなく、担任と授業と図書館業務を並列で行わなければならない

い。仕事量がただでさえ多いのに、さらにもう一つ抱え込むことになるのだ。職場によっては、司書業務の為に教科の授業を少し減らしてくれる場合もあるそうだ。だが、その場合、減った授業分が他の先生にまわることになる。その先生が、必ずしもいい気分で、理解を示してくれるとは限らない。結局、司書教諭になっても悪戯に仕事量を増やすだけで、授業も図書館も何一つ満足にこなしかねない現状が生まれる。だから、司書教諭の免許を持っていても、仕事を増やしたくない、これ以上増やせないという思いから、

免許を隠す人が少なくない。

先日、私が今後の異動について校長と面接をしたときに「司書教諭として働けるところに異動したい」と言ったところ、驚かれた。それだけ、免許を持っていると告白することが、珍しいことようだ。なお、私は現在、都立の特別支援学校に勤務しているが、教室不足のため図書は廊下に分散して置かれ、図書室もなければ業務としての図書部もない。 (会員)

第39回 「なごやレファレンス探検隊」に参加して 石井 一郎

8月5日、名古屋市立鶴舞中央図書館にて表記の会が開催された。なごやレファレンス探検隊は、愛知県下の公立図書館や大学図書館の職員による勉強会。2001年1月に始まり、第39回を迎えた。私は、第13回から参加している。今までは回答のみであったが、例会に初めて参加したので報告したい。

午後7時、鶴舞中央図書館第一集会室にて会が始まった。代表のあいさつに続いて参加者の自己紹介があった。参加者は30名ほどで、一人一人が所属と氏名を名乗り、簡単なあいさつをした。

例題の検討に入る前に、クイックレファレンスのコーナーがあった。事務局より、日本の最新の太陽光発電量について出題があった。出題と同時に、参加者は受付時に配られた回答用紙に調査の手順や方針を書き込む。書き終わる時間を見計らい、出題者が数名をあてて回答してもらった。出題者が解説と参考資料の紹介をした。

次に、今回の問題の検討に入った。第1問は谷崎潤一郎の「鴨東綺譚」について読みたい。回答者は10名。出題文では「ぼくとうきたん」とあったため、回答の中には永井荷風にはまってしまった人もいた。この小説はモデルになった方もめた経緯があり、「週刊新潮」で連載されていたが中止になった作品。この問題は半田市立図書館であった事例である。コメントーターから半田市の回答として、「週刊新潮」の所蔵先として名古屋大学附属図書館の紹介と事件の概要の載っている『われよりほかに』伊吹和子著(講談社1994年)を提供したと説明があった。コメントーター自身は、『われよりさきに』を読んでいて知っていたとのこと。説明の後、個々の回答それぞれ

についてコメントしていった。

全体の回答としては、インターネット検索や作家研究の本から「週刊新潮」の昭和31年2月19日号から3月20日号に連載されたことをつきとめ、所蔵先については地元の名古屋大学附属図書館を挙げている。モデルになった市田さんについて調査された方もいた。

第2問は、中部国際空港に着陸する飛行機が右から入ると左から入るのがあるが、違いは何か。回答者は9名。コメントーターから問題および参考資料の説明があった。参考資料として空港や航空管制や飛行機や中部国際空港の本を1冊ずつ挙げられていた。滑走路が風向きによって設計され、飛行機は向かい風にして着陸する。滑走路の端に表示されている数字2桁の意味がわかるのに苦労したとのこと。数字は磁北を0度とし、10度単位の度数の上2桁であり、使用する滑走路の方向を示す。中部国際空港は滑走路が一つで、ランウェイ18とランウェイ36。紹介された『中部国際空港建設工事記録』(中部国際空港株式会社2005年)に運用比率の表でランウェイ36の使用(南から進入)が80.9%であり、ランウェイ18(北から進入)が19.1%がわかる。説明の後、回答についてのコメントあり。

中部国際空港の本がほとんどないせいか、回答として使用した本が少なかった。中部国際空港としての回答もしにくかった。回答の中で参考として、ヤフーの知恵袋にあったセントレアの着陸方法についての質問(2009.2.7)の回答にある中部国際空港の気象情報(METAR)のサイトを使用した説明が紹介されているのがあった。

2問を終えたところで、10分間の休憩となった。今回の参考資料が会場の前方に展示されていたので手にとって見ている方もいた。

休憩を終え再開。第3問に入る前に事後報告があった。以前出題されたアロハシャツの由来について、照会していたところから回答があったとのこと。外来語の調べ方についての説明があった。

第3問は国民年金制度がいつ始まったか。加入者の支払額の推移についての問題。回答者は7名。コメンテーターの方が実際受けた質問である。制度の開始については百科事典で回答し、支払額については年金課に確認したがわからず、社会保険庁の連絡先を紹介したとのこと。支払額については全体なのか個人なのかによって回答が違って来る。利用者に確認が必要。回答にあった資料を制度と個人額の記述内容についてまとめた表の説明があった。社会保険庁のホームページの情報の紹介もあり、社会保険大学のテキストに定額保険料の改定状況の表があったとのこと。

最後に「しゃべり場」コーナーがあった。今回のテーマは「図書館のチョットいい話」。財政難で資料費削減されていることを利用者に話したら、寄付があったという話から始まり、寄付の話が続いた。今日のカウンターでの出来事として、30年ほど前の中日新聞の記事を見にこられた方の話があった。利用者は男性で、おばさんが中国残留孤児で帰国した際の記事を探しにこられたとのこと。中日新聞社に日付を確認したが、新聞社より図書館が近いのでこられた。マイクロフィルムを提供し、コピーしてもらったとのこと。

定刻の9時を過ぎて、終了した。2時間はあっという間に過ぎてしまった。三多摩の句会形式のレファ探や神奈川のゼミ形式のレファ探とも違い、密度が濃い例会だった。2時間をめいっぱい使い、段取りよく進められていた。クイックレファレンスコーナーは、回答を出していない人でも参加できるのでいい。これから、年に一度は例会に参加していきたい。

(追記) 例会の翌日、中部国際空港に行った。名鉄名古屋駅から特急で約30分。展望デッキを見学した。午前10時半ころはランウェイ18から離陸する機が多かった。手すり部分に飛行機や空港に関する問題が

あり、問19に滑走路の数字があった。デッキに太陽光発電量の電光表示板もあった。

(会員/町田市役所職員)

リレー・エッセー

「読書空間という居場所」

三宅 紳平

私は読書が好きです。単純に本を読むことが好きなのですが、本を読む場所も好きです。出勤前のドトール、深夜のマクドナルド、新宿までの小田急線(あえて各駅停車に乗ります)など普段の生活とは違う場所で本を読むのが好きです。平日は家と職場とを往復するだけの生活で、仕事中はお客様や内部職員とのやり取りに神経を使うことが多いので、せめて読書をする時間だけでも穏やかな気持ちになれる読書空間が好きです。

90年代に社会学者の宮台真司が「肩肘はらずに脱力して、楽になれる『居場所』」の大切さを説いていましたが、私にとっては読書空間こそがそのような居場所です。日本経済が厳しさを増す中で、多くの方が職場、学校、家庭で色々に努力し切り詰めて生活しなければならない状況です。本を読む時間の穏やかな時間は、日常のささやかなオアシスのようです。

読書空間をともにする人々と作り出す奇妙な一体感も好きです。早朝のドトールにはだいたい同じお客さんが集まり、おのおのが本を読んだり、勉強をしたりしています。お互い挨拶を交わしたりはしませんがいつもの朝の同じ風景・変わらない安心感を与えてくれます。各駅停車の小田急線から見える風景も変わらない安心感を与えてくれます。

私には本を読む楽しみだけでなく、穏やかな気持ちと安心感を与えてくれる読書空間の喜びがあります。本が好きで良かったなあと思います。

参考/宮台真司『世紀末の作法』(角川文庫)1997年

(町田市役所職員)

“ヌティナム図書館”からの風は、けやきの梢を揺らすように爽やかだった！

さる10月3・4日に国立オリンピック青少年記念センターにて「親子読書地域文庫全国連絡会(通称 親地連)第17回全国交流集会」が300名余の参加者を集めて開かれた。その1日目には韓国のヌティナム図書館館長 朴英淑(パク・ヨンスク)氏の「誰もが夢みる権利を行使する社会のために」と題する講演があった。これは2004年来日した朴氏と懇談し、その後2008年にヌティナム図書館財団主催のシンポジウムに招待されてさらに交流を深めた親地連代表の広瀬氏の、今度はぜひ日本へお招きして日本の方々にも朴氏の話聞いてもらいたいとの願いがようやくかなってこの日を迎える運びとなったものだ。

さてこの「けやきの木」を意味するヌティナム図書館とは、一体どんな図書館なのだろうか。朴氏のお話から抜粋してご紹介したい。(水越規容子)

ヌティナム図書館とは

2000年、ソウルに近い竜仁(ヨンイン)市の団地内のビルの地下、わずか40坪に私設の「子どものためのフリースペース」といった趣で誕生した空間、それがヌティナム子ども図書館だ。当時の韓国では公共図書館の数はわずか400館に過ぎず、民間の図書館など考えられない状況だったようだ。

一方で90年代終わりの通貨危機を経て家族の崩壊などが社会問題化し、他方乱開発による共同体の破壊が進行し、社会不安と激しい受験競争の中で行き場を失った子どもたちが増えていた。「すべての子どもは幸せになる権利がある」という確固たる想いから「誰もが気楽に訪れて人と通じ合える空間」を私費で作り、しかもそこを「本でいっぱいにしよう」と思ったという朴氏、なんとという見識だろう、そして実行力だろう！ その実現のためにどれほどの犠牲を払い、またあちらこちらから資金援助を請うたことだろうか。想像するだけでも頭がくらくらしそうだが、しかしそうした苦労は微塵も見せず、若い朴氏は淡々と、だが力強く語りかけるのだ。

韓国の読書事情

韓国での受験競争が日本のそれと比較しても非常に苛烈なことは、つとに知られているのだが、驚くべきは読書すらがその道具になっていることだろう。韓

国で読書といったら、まずは受験に勝つための読解力をつけることが主たる目的となっていると聞く。楽しみのための読書などということは考えられず、大学受験に「読書認証制」という制度が導入され「読書能力」が受験のための重要なスキルになっているという。その詳細は定かではないが、朴氏が言うには図書館までもがこの流れに乗って、年齢別の読書指導や論述課程を開設しているという。人々の図書館に対する要求も、あたかも学校に対するように、受験に勝ち抜く術を教えることを期待しているかのようだ。

ここ数年韓国発のすてきな絵本や物語の翻訳が相次いでいるが、どうやら本国では、これらは子どもたちが自由に想像を膨らませたり、楽しんだりすることには使われていないのだろうか、と少し不安になってしまう。この点は確かめたわけではないので、私の誤解であつたら申し訳ないのだが。

しかし、朴氏の言葉から想像するに、図書館界が自らの存在意義をあきらめて、巨大な教育資本と真っ向から争っている、そんな図式が垣間見られる。

図書館での子どもたち

読書は、多様な考え方や感じ方・文化・時代・歴史・人生の物語と出会うことであり、結果として異なる考え方や感じ方の人との間に対話を促すきっかけとなる。本が恐怖と不安とで硬くなった人々の考え方をかき回す、そのためにはまず、本を読むことが楽しみとならなければならない、と朴氏は語る。しかし韓国の現状では、子どもたちには「本読み」が強制されているらしい。「本読みから自由にならなければならない」との言葉はそんな事情を物語っている。

さてヌティナム図書館では「本読みを押し付ける代わりに」「本が人に近づいていくようにする試み」を様々に展開しているという。例えば、本棚近くにブランコや屋根裏部屋を設け、子どもたちが遊んでいる中で自然と本に接するような仕掛けを。また本を読む楽しさを共有する機会を多く設け、さらには人と人が出会う空間であろうと目論んでいる。

図書館へ来て毎日寝転ぶ子どもたちは、遊び場より図書館が好きになり、本に関心のないような子も足繁く通うようになり、「やりたいことが多くなった」との

言葉が聞かれるようになり…成績の良い模範生も、発達障害のある子どもも、少年院に行って保護観察中の子どもも、まったく異なる環境の子どもたちがなんの違和感なく触れ合っているという。

いいことばかりではむろんない。社会から疎外され、絶望だけをもってかろうじて生きてきたような子どもたちに、本は、そして図書館はいったい何ができるのかと真剣に悩んでいる。あまりに無力であることを知りつつ「ただ機会を見計らって本を読んであげることだった」という。一つひとつの試みが常に上手くいくわけではなく、簡単に壊れてしまうこともあるのだが、それでも「夢を持って生きていく人々に会える場所」として図書館を守っていこうと思いつくのだ。たくさんの失敗と苦い経験が幾重にも折り重なって、今のヌティナムの礎石を磐石のものにしているのだろうと感ずる。

「図書館に一步入れば武装解除になる」とはある利用者の感想だが、なんという比喻だろう。しかし朴氏は、なぜ子どもたちがそう感じるようになったのか、いくら考えてもうまく説明できないという。一つ理由があるとすれば、それは競争や評価から自由だからではないかと。しかし同時に自由というのはなかなか難しい試みで、両極の要求の間で均衡を取るのは、まるで綱渡りの技のようだという。それでも、自発性の深い意味に信頼を置いて、規制ではなく、みなで膝突き合わせて解決の糸口を探る根気強い試みを続けていきたいと語る。その静かな口調の中に、強靱ではあるがしなやかさを、頑固ではあるが寛容さを感じる。

ボランティア活動家

長く支援しているという読書会の活動は、子どもだけでなく子どもを生んで家事に埋もれて孤独を感じていた主婦たちにも、知的成長の楽しさと友だち作りの場を提供している。そうした図書館の価値を自ら体験し自己肯定感を得た人たちの中から、もっと図書館を豊かにしようと「自願活動家」が生まれてきた。

朴氏は「奉仕」という言葉の代わりにあえて「活動家」という言葉を使う。これは他人のために奉仕するのではなく、あくまで自分がやりたいことに参加して「活動」するという意味を強調したいからだという。しかもこの活動家は「そこから自分が得るものや楽しむものがもっと多い」と言い、それがボランティア活動を持続させる力だと言い切る。ヌティナム図書館は 100



人を越えるこの「自願活動家」によって支えられている。

しかしヌティナムがボランティア活動の活性化に力を注ぐ理由は人手を増やすためだけではなく(実際きめ細かなサービスが可能なのは、その多くを彼らの存在に負っているからだ)、一利用者が「私たちの図書館」を一緒に動かす立場に変わることによって意義を見出しているからだ。また彼らは利用者と運営者や職員の間で活発で密度の濃い会話の媒介者ともなるのだ。しかも硬直しない、枠に囚われない、活動の幅と余地を十分に残しておく工夫も。

ヌティナム図書館の波及効果

わずか 10 年前に生まれた小さなけやきの若木が、今や 1 日に 1000 冊の貸出しを超える公共図書館に育った。私立ではあるが公共図書館であるという位置づけはいかにも朴氏らしいもので、ユネスコ公共図書館宣言にのっとり、「無料」の原則を守り、さらに「公共」の意味を深め豊かにしようと実践を積み重ねる。激しい市場原理にさらされながらも、非資本主義的な自発性や多様性を市民社会に根付かせることを願っている。図書館はそのための強力な足がかりであり、なおかつ誰にも否定できない証明となりつつある。ヌティナムの成功は大きな刺激となって全国に波及し、地方自治体や市民団体の働きで 10 館の子ども図書館が新たに作られたという。ヌティナムの形式だけでなく、その目指すところが深く理解され共感され、幾重にも広がっていくことを願うばかりだ。

ひるがえって現在の日本を考えた時、さて何と形容しようか。若い朴氏のゆるぎない信念とひたむきな実践に触れて、この講演をもっと多くの人に、図書館界や教育界、あるべき社会の姿を模索しているすべての人たちに広く聴いて欲しかったとつくづく感じた。おそらくまた機会は訪れるだろう。その折はぜひお見逃しのないように！

(会員)

【本の紹介】

馬場俊明『中井正一伝説 二十一の肖像による誘惑』ポット出版、2009



馬場 俊明
定価 3500+税
ISBN978-4-7808-0127-9
C0023
四六判 / 456 ページ / 上製
[2009年06月刊行]

国会図書館本館の一階カウンターの上頭に彫られている「真理がわれらを自由にする」という文言が、国立国会図書館法からの引用であって、もともとは羽仁五郎の言葉だということは知っていたが、その羽仁に推されて、初代の副館長に就任した中井正一の実在は、まったく知らなかった。

中井正一その人やかれの生涯は、一言、二言ではまるで及ばない多くの彩りに満ちたものだが、あえて項目にしてみると、こんなことだろうか。

中井正一とは、当時希有だった帝王切開によって生を与えられ、その母千代の影響もあって自らを「如来の子」と自負するほどに、大乘的な観念を奥底にたたえた人。治安維持法下にあつては、『土曜日』、『美・批評』あるいは『世界文化』などの雑誌をつぎつぎと世に送り、精神の自由を身をもって示し、説いた人。戦後、尾道市立図書館を拠点に、荒廃した地域社会を復興する活動に精魂を傾けた人。あるいは、羽仁五郎の推薦により就いた国会図書館の初代副館長のポストにあつて、その国会図書館を国民に手渡しするべく奮闘した人。

本書は、中井正一の評伝である。

タイトルにある「伝説」とは、行動や活動のプロセスから紡ぎだされる物語やイメージであつて、中井正一にまつわる「伝説」への着目は、整序された論理や叙述された思想だけをもってしては、中井正一をとらえることができない、という著者馬場俊明の方法的な先見とうけとつてよいだろう。

しかしだからと言って、中井が残したおびただしい数の文章に眼を通さずして、中井が解ることではない。

一本一本のオールを流さないこと、誤魔化さないこと、それはむしろ、いわるべき言葉ではなくして、筋肉によって味覚さるべきものである。疲切った腕が尚も一本一本のオールを引切つて行くその重い気分は、人生の深い諦視と決意の底に澄透れる微笑にも似る。この微笑気分はよき練習と行きとどいた技術の訓練に於いては特殊の「冴え」をもたらすものである。

(「スポーツ気分の構造」より引用)

ひとたび眼にすると、瑞々しさや輪郭の明晰さに思わずハッとさせられるような中井の言葉が、むしろ本書には溢れている。書かれてから70年も80年も経た文章が、これほどにも生彩を放つのは、いったいどのような所以によるのだろうか。ファンズム下の市民運動や戦後の復興運動の渦中から紡ぎだされた中井の言葉の叢に、よし分け入つてみようという気持ちにさせられた一冊だ。

(杉山 弘・会員/町田市立自由民権資料館)

「第二次町田市子ども読書活動推進計画」作成の経過報告 - その後 -

「市民有識者による懇談会」は8、9、10、11月と、計4回の会合を持ち、市側から提示された推進計画案に対して毎回それぞれの立場で意見をのべました。そのたびに意見を取り入れ修正された計画案が出されるなどしましたが、作業事務局の担当者(図書館)は、懇談会での要望と教育委員会や指導課や策定部会との間に立って大変ご苦労された様子が伺えました。

計画(案)の基本理念は、「自ら進んで本を読む子を育てる」、基本目標は「1. 子どもが本と出合うきっかけ作り、2. いつでも身近なところに本がある環境の整備、3. 子どもの読書に関わる本の配置と育成」を掲げ、町田市すべての子どもが、本と出合える・本を手渡してくれる人と出会える場、を考慮に入れた読書環境作りの推進計画となっています。

前号で「市は、1月頃に「第二次町田市子ども読書推進計画」のパブリックコメントを募集する予定だそうですので、実りある推進計画になるよう皆さんからもご意見を出していただければと思います」とお知らせを載せましたが、諸般の事情で市民からの意見は募集しないことになったようです。

懇談会での意見を教育委員会や策定部会(全庁担当者)に出して、調整を図るのに時間がかかるということと、既に市民による懇談会を設けて、そこで意見を出してもらっているからという理由ですが、一番の問題は、4月発布までに間に合わせなければならないという時間的なものようです。

結果的に、推進計画は、懇談会側の意見が少々取り入れられたとはいえ、予算を抜きにしたたくさんの項目が盛り込まれ、「人」の問題もなおざりにされた状態での見切り発車となりそうです。

しかし、この「5ヵ年計画」の中で特筆に値すべきことは、推進計画の着実な実施に向けて進行状況をチェックする「子ども読書活動推進窓口」と、「町田市子ども読書活動推進会議」が取り組まれ、2年間の検討猶予を経て2012年度には設置される、という項目を盛り込んだことです。

懇談会の中でも、理想を言うことはたやすいが一步でも前進するためにはある程度の妥協が必要で、5年後には子どもの読書環境が少しでも良くなるように見守っていききたい、と言う意見が出されましたが、我々も第二次推進計画が遂行されるよう目を向けていく努力をしていきたいものです。(増山)

町田の学校図書館を考える会 〈11月定例会報告/7日(土)10:30~12:30〉

公民館6階フリースペースにて/出席者:清水・谷釜・伴・水越・市川

(1)小学校への質問表をまとめるにあたって、変更事項を確認。

(2)学校図書館見学について

山崎小学校: 11月17日(火)午後、見学予定
(谷釜・水越・市川が参加可能)

山崎中、七国山小学校も一緒に見学できるよう、
谷釜、伴が問い合わせる。

(3)連続講座について

★1回目は12月6日(日)午後2時~4時
まちだ中央立公民館 第3・4学習室にて

・「ブックトークを楽しく」講師:丸岡和代さん

・学校図書館用飾り:ぱたぱた

(型紙は谷釜が印刷して用意する。(25枚))

・新刊本紹介:低学年用中心に今年度出版のもの

★2回目は1月17日(日)

町田市民文学館の会議室を予約。

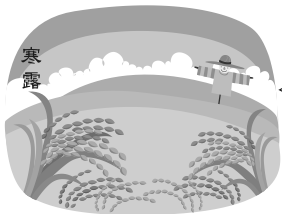
田沼美恵子さんに学校図書館の基本について
お願いする予定。

(4)図書館を会場にすることについて

土日の会場貸出は、鍵の開閉を職員に
お願いする関係上、無理になってきたとのこと。
考える会だけでなく、市民の権利の問題にも
つながっていくことなので、今後も交渉してい
こうということに。

*次回12月定例会は、12日(土)10:30~
公民館フリースペースにて行う予定。

(報告/代表:伴紀子)



ひろば

<10月例会報告>21日(水)
16:30~会報143号印刷
18:00~20:00 例会
於:中央図書館中集會室

出席/石井 伊藤 片岡 鈴木 高橋 手嶋
増山 丸岡 水越 桃澤 守谷 山口

- 「知恵の樹」144号について。
- ・巻頭言は当会のML管理者でもある鈴木さん。
- ・韓国私設「ヌティナム図書館」報告(P4, 5)、他
- NPO らいぶらいぶとの交流会感想・・・「熱意」「理想」は伝わったが、「将来への不安」や「がんばりすぎへの心配」、「労働と賃金の過酷さ」なども感じられた、など。
- 今年度の講演会・・・「図書館っていいなあ」と参加者が思える講演をしてくれる人、の候補を挙げる。
- 学校図書館を考える会(p7参照)・・・会場の確保が難しく講座もやりにくい状態。
- 図書館集會室利用について・・・とても面倒。借りるための窓口は5階、担当職員と共に6階の會議室に行き鍵の開閉をしてもらうなど階段を上がったり下りたり。利用時間のコマ割りも非常に使いづらい。また、土、日は職員が忙しいという理由で、會議室の貸出を禁止するなどしているが、もっと簡素化して、忙しい職員の手を煩わせなくてもすむように改めてもらいたい。集會室利用について、より簡便で利用し易い方法を図書館側と話したい。
- 都立中央図書館収蔵の約8万冊の多摩地区の資料が廃棄処分になる処置を巡って、散逸を防ごうと多摩の館長会や多摩デポなどが都立のやり方に対し、検討、抗議などを行っている。注目していきたい。
- 「すすめる会」のMLは、現在個人会員と団体会員代表のメンバーで行っているが、広く団体会員個人の方にも情報交換の場をということで、次の手順で門戸を開くことになった・・・団体会員でMLに参加希望される方は名前・アドレス・住所などを添えて団体代表に申し出る。団体会員代表⇒事務局(増山) ⇒ML管理者(鈴木)が登録。管理者は、ML投稿上の決まりを、新規参加者に連絡。
- 図書館関連で気になった記事を3つ紹介(石井)／①「文蔵 2009年9月号」特集:横浜・鎌倉文学散歩。／②「プレゼント ファミリー 2009年11月号」特集:全国9エリアで調査 図書館貸し出し人気本ランキングを紹介／③「寒川文書館だより Vol.5」。08年の寒川文書館のできごとの記事。図書館利用のPRの参考に。

2009年度 第9回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

12月17日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

- *町田ゆかりの作家「半田義之」 原 忍
 - *「象の居るアパート」(別役実作) 竹本すみ子
 - *「奈良池と桜の木」(町田の民話) 永田恭子
 - *「おはなし名人レイラ」(イラクの民話) 平田えり子
- <語り:まちだ語り手の会> 直接会場へ! 保育申込

○多摩デポブックレットの第2弾『地域資料の収集と保存』が発行された。手嶋さんに申し込みば@520円。

お知らせ

- 「(仮)唐木田図書館」の「市の直営を要望する陳情」署名120名分を「多摩市に中央図書館をつくる会」に送付。ご協力ありがとうございました!
- ★図書館フォーラム・かわさき 2009~第12回図書館を考える市民・職員・教職員の集い~/基調講演「若きサタの悩み—ことばと図書館をめぐる—」アーサー・ピナード氏/パネルディスカッション「こどもからの読書環境~くらしに活かす図書館~/12/13(日)13:00~16:30/川崎市生活文化会館 てくの川崎(溝の口駅徒歩5分) 500円/Fax 044-953-8748(小林) 迄、名前・住所・Tel 番号を書いて申込/〆切り=12/2(100名)
- ★関 曠野(せき ひろの)氏(評論家)パーシブインカム(基礎所得保証)を語る in 町田/11/29(日)14:30~17:00/場所:勝楽寺(中央図書館方面) 500円/九条・まちだ(☎&Fax 042-722-4935)
- ★町田上映会「ぼくはうみがみたくなりました」(自閉症の青年を主人公として描いた作品。撮影の舞台は町田市と三浦市)/12/1(火) ①10時~②13時~③16時~④19時半~(上映時間103分)/1,000円(当日券のみ)/町田市民フォーラム3Fホール(定員180名)/主催:まちされん&ぼくうみ実行委員会(HP)

■あとがき■

公民館の講座で学び、力をつけ、仲間を得て、自立した市民活動が続いている女性が町田には多い。その背景には、市職員として長年公民館で社会教育の主軸を担ってきた大石洋子さんの存在が大きく影響する。先日、公職を再定年で退かれる大石さんの「お疲れさまの会」が催され80名を超える人が駆けつけた。その誰もが、私心を捨てて町田の社会教育問題に取り組んできた大石さんに感謝しエールを送った。私もそのひとりである。「住民の側に立って仕事をしていくということがどういうことなのかを、住民とともに学びあって育っていく職員を見るのが楽しみでした」と、大石さんが講演で話された記録を読んだが、大石さん自身そうした稀有な職員であった。ほんとお疲れ様でした! (M⁴)